

# Effects of Weight Loss on Sweet Taste Preference and Palatability following Cognitive Behavioral Therapy for Women with Obesity

西原, 智恵

<https://doi.org/10.15017/4059943>

---

出版情報 : 九州大学, 2019, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License (CC BY-NC-ND)

氏 名：西原 智恵

論 文 名：Effects of Weight Loss on Sweet Taste Preference and Palatability following  
Cognitive Behavioral Therapy for Women with Obesity  
(肥満女性における認知行動療法による減量後の甘味嗜好・甘味に伴う快情  
動の変化)

区 分：甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

**(目的)** 肥満は甘味覚の変化と関連があることが指摘されている。本研究の目的は、肥満者において、認知行動療法を用いた非外科的な減量により甘味覚の変化が起こるかを検討することである。

**(方法)** 21歳から64歳の女性51人を対象とした症例対照研究である。27名の肥満女性 (BMI  $29.8 \pm 0.5 \text{kg/m}^2$ ) が肥満群に、24名の正常体重女性 (BMI:  $20.9 \pm 0.3 \text{kg/m}^2$ ) が健常群に組み込まれた。肥満群は認知行動療法を用いた30週の集団減量治療に参加した。スクロース液を用いて、甘味覚の構成要素である閾値濃度、味受容強度、嗜好濃度、味反復刺激に伴う快情動の変動を介入前後で測定し、肥満群と健常群を比較した。また、心理検査と摂食関連ホルモンの測定を行った。

**(結果)** 肥満群23名、健常群22名が最終評価を終えた。肥満群は、介入により14.6%の体重減少を認めた。介入前、肥満群は健常群より有意に高濃度のスクロース液を好んだが、介入後は両群の有意差はなくなった。肥満群では、甘味反復刺激に伴う快情動の持続や他の味への欲求の増高しにくさを認めたが、減量後には健常群と同等に正常化した。味覚の弁別要素である閾値濃度や味受容強度は、介入前後とも両群間で有意差を認めなかった。肥満群において、介入前の嗜好濃度と血清レプチン濃度は、BMI、うつ症状、不安特性の交絡因子調整後に有意な相関を認めた。

**(結論)** 肥満女性に対する認知行動療法を用いた非外科的な減量は、治療前に見られた甘味嗜好濃度や甘味反復刺激下の快情動の持続を正常化した。また、肥満群における甘味嗜好の増強にはレプチンの作用が関与している可能性が示唆された。